Living Nature Kobe
ロゴメイキングストーリー

Living Nature Kobeのロゴは、神戸の植栽活動に色んな人が参加し、みんなで学び広げていく運動として旗振り役となるべく誕生しました。季節とともに芽吹き、そして枯れ、また種を生む植物の生育サイクルをブーケの形状で表現しています。Naturalistic Landscapingの手法の一つであるカッティングブーケからインスピレーションを得ています。3つのシードヘッドはLNKで取り組むミッションを表しています。木版画作家の本田このみさんにロゴデザインを依頼し、デザインした後、木版を作成。版を摺ってデータ化したものを最終ロゴとしました。いろいろなものが便利に簡単にできてしまう昨今で、LNKの取り組みともつながる、手をかけて作り出す素晴らしさをロゴ制作でも表現しました。

Special Thanks_
（順不同）
GREEN COMMONS
一般社団法人 神戸市造園協力会
一般社団法人 リパブルシティイニシアティブ
神戸市公園緑化協会
栗栖宝一さん
島田智里さん
平工詠子さん
福岡孝則さん
山崎満広さん
綾町役場 建設課 管理係
一般社団法人 御堂筋まちづくりネットワーク
株式会社 グリーンチーム

Photo Provided_
GREEN COMMONS
一般社団法人神戸市造園協力会
株式会社 グリーンチーム
平工詠子さん
福岡市
神戸市

2024年3月31日発行
発行：神戸市
制作：株式会社AKIND

Living
Nature
Kobe

自然と共に
暮らす都市・神戸

01 **Living Nature Kobe**

02 **The Launch of LNK**
Living Nature Kobeの発足

06 **LNK Projects**
現在までの代表的なプロジェクト

13 **Next Action**
これからのLiving Nature Kobe

14 **Story Behind**
Livng Nature Kobe発足のきっかけ

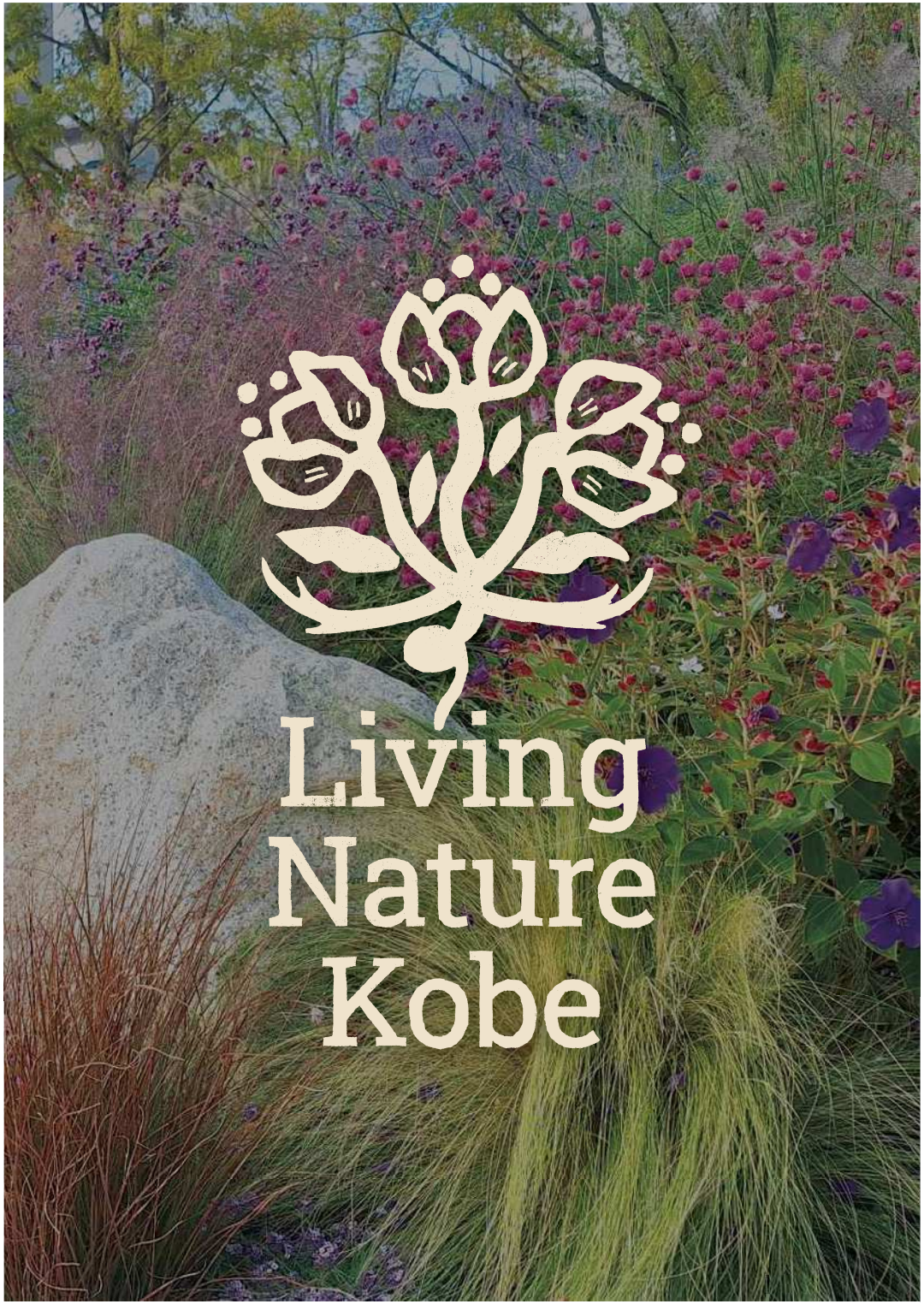
18 **Case Studies**
国内外事例

Living Nature Kobeとは

人と自然が共にいきる豊かさを大切にして、神戸らしいみどりと花のまちづくりを進めるムーブメントです。まちづくりにサステナビリティの考えを取り入れるため、2021年に始動しました。

神戸らしい、人と自然が共にいきる風景を「自然の景」と呼び、再整備が進んでいる都心・三宮を中心に「自然の景」でまちがつながり、季節の変化や自然の心地よさを感じる美しい風景を広げ、自然と共に暮らす都市・神戸を目指します。

Photo Location：表紙・コンセプトページ：東遊園地 I てんくうののはら／目次上：東遊園地 I てんくうののはら／目次下：京町筋北側



「自然の景」を共につくり
人と自然が共にいきる
Living Nature Kobe

六甲の山々と瀬戸内海に抱かれたまちの中を、
山と海からの爽やかな風が通りぬけ、
多様な街並みがみどりで繋がり、
人の賑わいが花々で彩られる。

神戸に暮らす人、神戸を訪れる人が、
季節と共に芽吹き、花に溢れ、
枯れるまでの植物の変化を愛でながら、
自然の心地よさを感じる。

Living Nature Kobeは、
人と自然が共にいきる豊かさを
感じられる風景を神戸につくり、
自然と共に暮らす都市・神戸を目指します。

市民・造園家・企業・行政の協働を推進するため、みどりと花のブランド戦略「Living Nature Kobe」を策定

Living Nature Kobe策定の流れ

- **2000** 緑の基本計画（グリーンコウベ21プラン）策定
- **2011** 緑の基本計画（グリーンコウベ21プラン）10年間の取り組みを検証・評価の上、改定
- **2015** 都心・三宮再整備 KOBE VISION取りまとめ 再整備基本構想策定
- **2021** **Living Nature Kobe策定** GREEN COMMONS始動
- **2022** 神戸三宮「えき≈まち空間」・税関線景観デザインコード策定
- **2023** 東遊園地 リニューアルオープン
- **2024** 磯上公園 リニューアルオープン

Living Nature Kobeの背景

神戸の緑のまちづくりは、緑の基本計画（グリーンコウベ21プラン）に基づき、「緑とともに永遠に生き続ける都市＝緑生都市」を目指しています。
この基本計画に沿って、まちづくりにサステナビリティの考えを積極的に推進するため、みどりと花のブランド戦略「Living Nature Kobe」を2021年に策定しました。
神戸市内の公共空間の植栽は、これまで常に花が咲き続ける状態を優先してきたことにより、単調な景観になりつつありました。神戸市は、その現状を課題と捉え、神戸らしい自然環境を生かした「自然の景」づくりをテーマとしました。

2つの戦略的アプローチ

Living Nature Kobeでは、年月をかけて「自然の景」を創出するNaturalistic Landscapingと、瞬間的に「自然の景」を創出するFloral Installationという、2つのアプローチを組み合わせた戦略となっています。これらのアプローチは、世界的にも画期的な取り組みで、試行錯誤しながら進めています。そのため、造園手法に関する知識や技術の習得はもちろん、市民を含めて「植物をただの飾りとして捉えるのではなく、都市生活の中で自然の変化に意識を向け、人と自然が共にいきる豊かさを大切にする」という価値観に共感するコミュニティの育成が重要だと考えています。

Naturalistic Landscaping

Naturalistic Landscapingは、「自然環境による癒しを生む」「植物の生育サイクルをふまえる」「風景のつながりをつくる」の3つのコンセプトに基づき、まちなかに「自然の景」をつくっています。「自然の景」づくりは、高度な造園技術が必要であり、造園家や市民ボランティアと、公共花壇や市民花壇の整備・管理を通して実績を積み上げ、神戸らしい植栽ガイドラインのアップデートを進めています。さらに、造園家間の交流や市民が参加できる造園ボランティア活動を通じて、取り組みを拡大させています。

Floral Installation

Floral Installationでは、人々がまちの魅力を再発見できる機会を生み出すため、花を用いたアート的空間の演出に取り組んでいます。東遊園地のリニューアルオープン時の空間演出では、工事中で人通りが少なかったエリアに、新たな人の流れを呼び込むことに貢献。オープン後は、生産者や作り手から草花を購入できるマーケット、花を暮らしに取り込むヒントを届けるトークセッションやガーデンツアーなども開催されました。花が持つ華やかさ、優美性をSNSを通じ発信していくことで、Living Nature Kobeの認知度向上に寄与します。

東遊園地「てんぐうののはら」

Living Nature Kobeが掲げる3つの目標とは

Living Nature Kobeでは、神戸市が抱えていた3つの課題「再整備における植栽のデザイン方針」「植栽の取り組みや公共・市民花壇の周知」「インフラ管理におけるコストや人材」の解決に寄与するため、3つの目標を掲げています。

Naturalistic Lifestyle：
人と自然が共にいきるライフスタイルの醸成
（評価指数：市民参加数）

Self Sustaining Economy：
造園品質を持続するエコシステムの構築
（評価指数：ガーデナー登録者数）

Landscape Biodiversity：
生物多様性を取り戻す環境の整備
（評価指数：グリーンインフラ対象サイト数）

現在、これらの目標に沿って、神戸市が年度ごとの施策や計画を策定し、事業者や専門家と共にLiving Nature Kobeを推進しています。

Living Nature Kobeに関わる人々

Living Nature Kobeでは、人と自然が共にいきる豊かさを大切にする人々が、神戸らしい「自然の景」づくりに取り組むムーブメントとして、これまでの造園の考え方から大きく拡張し、多様なステークホルダーとの取り組みを想定しています。

1. 造園家・花卉農家

Naturalistic LandscapingやFloral Installationなどの新たな手法を学び、試し、実装することで、植栽の運営を支えるステークホルダーです。NPO法人やエリアマネジメント組織が共同することで、造園ボランティア、ガーデンツアー、ワークショップなどの活動を活性化させます。将来的には、地元生産者との連携で、自生植物や多年草を基本としたバリューチェーンの構築を目指します。

2. 市民・来街者

心地よい都市環境の恩恵を享受するだけでなく、ボランティア参加を通じて植栽の保全にも積極的に関わる機会を創出することで、人と自然が共にいきるライフスタイルを醸成します。また、そのような取り組みを市内外に発信することで、ボランティアによるガーデンツアーなどを通じて、自然を感じる街歩きとしての体験価値を高めていきます。

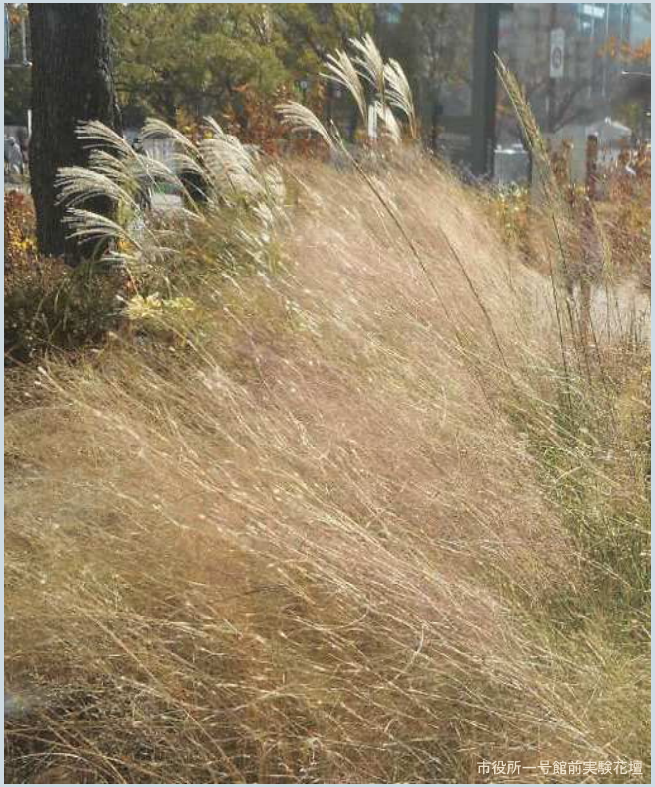
3. 企業

企業は、スポンサー花壇のみならず、SDGsに関連した取り組みに対するスポンサーシップに参加することで、行政予算のみに頼らない収益基盤の構築を支えます。

4. 行政

行政は、年度ごとにブランド戦略の推進に必要な規制緩和や予算獲得を行い、専門家とともに取り組みを振り返り、改善ループを回しながら、長期的に取り組む体制を整えます。

このように多様なステークホルダーが関わり、活躍する機会を設けることで、課題の一つであった「インフラ管理におけるコストや人材」の解決に繋げていきます。そして、継続的な取り組みを通じて、都心・三宮再整備エリア内の公共空間や広場にLiving Nature Kobeを展開し、まちづくりとの連携を推進していきます。将来的には、さらに多くのステークホルダーが参画するムーブメントへと拡張させ、商業エリアや住宅エリアなど神戸のまち全体へと取り組みを広げていくことを目指しています。


市役所一号館前実験花壇

LNK Vision 2025

Living Nature Kobeが導入されたまちの姿

Vision 1: 自然と共にいきる人たち

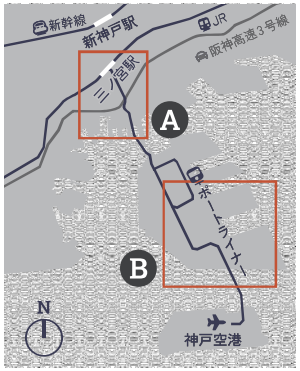
2025年の神戸では、人々のライフスタイルが変化している。公園でのんびり過ごす時間が増え、街を歩くと季節の変化を感じる。週末にはマーケットで花卉農家から多年草を直接購入し、子どもたちは虫や花とふれ合うことを楽しむ。市民ガーデナーは、草花の手入れを行い、ご褒美としてエディブルプランツや花を持ち帰る。さらに、フラワーアレンジメントのワークショップも開催され、自宅に常にみどりや花がある生活が日常化している。

Vision 2:「自然の景」を共につくるプロたち

2025年、日本で初めてNaturalictic Landscapingの大規模実装により、神戸が造園の先進都市となる。造園家たちが神戸で最先端の造園事例を学び、造園スキルを習得する次世代造園家が増加。都市部の景観を維持するため、継続性を踏まえた受託事業を通じて、造園業者や花卉農家が協力し合う。Floral Installationを通じたフラワーアートのコラボレーションが活発化し、世界的なガーデニングデザインの賞を受賞するアーティストが注目される。

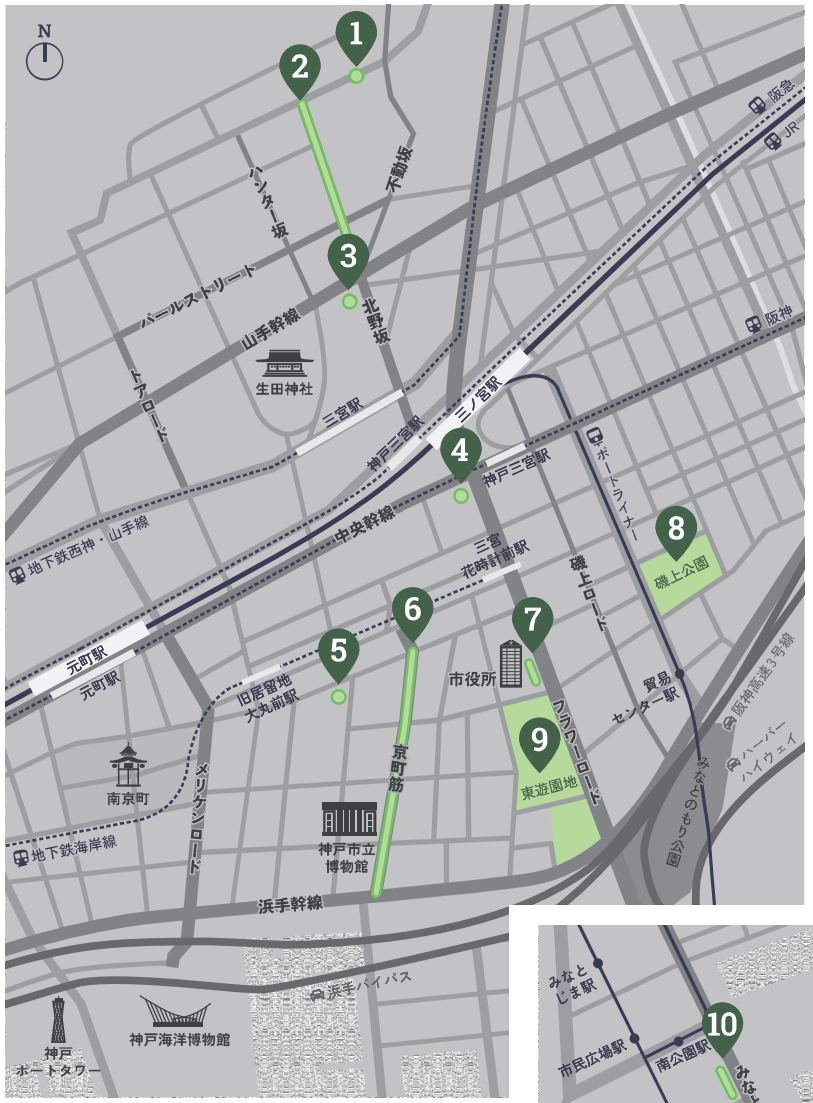
都心・三宮を中心に自然と広がる Living Nature Kobeのムーブメント

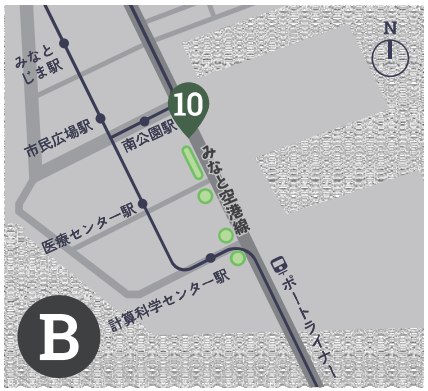
Living Nature Kobeでは、ブランド戦略を策定した2021年から造園事業者と行政と協働で、実証実験を行っています。2021年には、神戸市役所一号館の正面玄関の前にある花壇を対象に、Naturalistic Landscapingをテーマにした複数の造園事業者のコラボレーションを通じて、植栽デザイン・整備を行いました。
2022年には、専門家の監修のもと、京町筋の歩道沿いの一部の花壇を対象に、造園事業者間での勉強会を重ねながら、整備を行いました。その結果を振り返りながら、2023年には、京町筋での整備を段階的に拡張しています。
また、これらの取り組みに参加した造園事業者たちは、その他のエリアにおいても、自主的にNaturalistic Landscapingをテーマにした植栽デザインに挑戦しています。
その結果、現在では都心・三宮を中心に、山側は北野坂から、海側はポートアイランドまで、神戸のまちに「自然の景」が広がっています。



Naturalistic Landscapingを体験できる場所

1. 北野異人館バス停前
2. 北野坂｜沿道沿い花壇
3. 北野坂｜円形花壇
4. マルイ前歩道沿い花壇
5. 朝日会館前
6. 京町筋（詳細 P09）
7. 市役所一号館前（詳細 P09）
8. 磯上公園
9. 東遊園地（詳細 P10）
10. みなと空港線歩道沿い緑地





2022.03.08 開催

Living Nature Kobe シンポジウム

人と自然が共生する神戸のまちの花と緑

「人と自然が共生する神戸のまちの花と緑」をテーマに、シンポジウムを開催。栗栖氏によるNaturalistic Landscapingがもたらす癒やし効果やそれによるまちへのポジティブな影響についての基調講演から始まり、久元神戸市長、坊議長とのトークセッションではこれからの神戸の植栽について語り合いました。また、植栽デザインや都市計画の専門家による国内外の植栽デザインや公園づくりの取り組みが紹介されました。心地よい風景をつくるという共通認識の共有からなる地域コミュニティの強化や、環境負荷軽減に対する意識向上の必要性に加え、具体的な植栽デザインのプロセスやその管理体制についても語られました。パネルディスカッションでは、神戸のみどりと花のあり方について意見が交わされました。その中で、自然と都市とのつながりを実現するためには、行政の限られた部署だけではなく、様々な部署が参加できる取り組みになることが大事であること、様々な人たちの活動や想いを紐付けていくことが必要であることが強調されました。

Symposium Speakers

登壇者の皆さま

栗栖宝一 氏
造園家
日本庭園デザイナー

平工詠子 氏
植栽デザイナー
ガーデナー

島田智里 氏
ニューヨーク市公園局
都市計画＆GISスペシャリスト

山崎満広 氏
つくば市まちづくりアドバイザー
世界銀行シニア・コンサルタント

福岡孝則 氏
東京農業大学
地域環境科学部造園科学科
ランドスケープデザイン・情報学
研究室准教授、博士（学術）、RLA(US)

広脇淳 氏
神戸市建設局公園担当局長

※ 肩書は当時のものです

2021- 市役所一号館前実験花壇

2021年から神戸らしいNaturalistic Landscapingを模索するため、多年草と一年草を組み合わせた植栽デザインの実験花壇としてスタート。4区画それぞれ別の造園事業者がコンセプト立案、デザイン検討、施工、管理まで行いました。多年草を扱うことが少なかった事業者もいたため、花壇の大きさと植物の成長が合わないといった新たな発見や課題に直面することも。一年を通じた植栽の表情の引き出し方、特に冬枯れの姿の魅せ方を模索するため、実験的に植物の入れ替えや剪定を継続して実施しています。

2022- 京町筋

京町筋での植栽帯整備では、新神戸から京町筋を通り神戸港まで直線でつながる位置関係に着目し、六甲山の裾野が都心部まで広がり海までつながるような風景を全体のコンセプトに据えました。京町筋の植栽帯は幅が狭いため、植物選びや組み合わせ、風景のつくり方を植栽デザイナーの平工詠子氏とチームでアイデアを出し合いながら取り組みました。2022年に整備した南側は神戸市立博物館やオリエンタルホテルがあり、歩道幅も広く歩きやすいため、海への開放感を重視したデザインを採用。一方、2023年に整備した北側はビルが立ち並び、植栽帯に影が落ちる時間が長いため、山の環境を再現するようなデザインを意識しました。神戸の特性を反映させる地域性苗や御影石を使用しており、神戸の山々を彷彿とさせます。京町筋の取り組みでは、企業の枠を超えて造園業界全体としてスキルアップに取り組んでいます。それぞれの造園事業者が持つ特色や考え方の違いが刺激となり、技術や知識を共有し合うことで、Naturalistic Landscapingの表現を高めていきました。京町筋は三宮中心部から神戸ウォーターフロントにつながる主要な通りの一つです。日常の中に溶け込み、知らず知らずのうちに心地よさを感じられる風景となっています。

2023-

東遊園地

2023年4月にリニューアルオープンした東遊園地には、「自然の景」を感じられる3つのガーデンがあります。
まず、旧居留地側にある居留地ガーデンは「街へつづくのはら」として、京町筋プロジェクトでも使用されている植物が使われ、風景のつながりを表現しています。このガーデンには神戸開港時や多文化共生の魅力を感じる様々な記念碑もあり、神戸の歴史も感じることができます。
次に見晴らしひろばの斜面に広がる「てんくうののはら」と呼ばれるテラスガーデンには、ガーデンの中に入り込める迷路のような通路があり、没入感を提供します。斜面を活かし、植物を塊で配置することで奥行きを感じることができ、草花の重なりの間に子どもたちが走り回る様子も見られます。華やかさや彩りを意識したこのガーデンでは、公園内の造形物とも自然な調和を図り、四季折々の美しい景色を楽しむことができます。
最後にボランティアガーデンでは市民ガーデナーと共に植物を管理しながら、既成概念にとらわれない植栽を行っています。エディブルプランツや、在来種以外の珍しい植物など、気候変動などの環境変化に対応しうる植物も積極的に取り入れ豊かな風景を作り出します。暑い夏や湿気に強い植物の育成や、日当たりの検証なども行われています。
これら3つのガーデンはそれぞれ特徴が異なりながらもNaturalistic Landscapingとして統一され、時を重ねるごとに魅力が増して美しい風景が広がっていきます。東遊園地を起点に、自然と都市がつながる「自然の景」が広がっていきます。

東遊園地のオープニングにはFloral Installationのオブジェもお目見え。公園の門出を祝いました。

2021-

GREEN COMMONS

GREEN COMMONS（グリーンコモンズ）は、2021年に始まった「まちの花と緑をみんなで育てる」プロジェクトです。一年草中心から多年草中心の植栽に転換された花壇を管理できる市民ガーデナーを育てることを目指します。現在、東遊園地のボランティアガーデンを拠点に、専門家講師による座学や実技指導を通して、専門的な知識を深め、持続的な植栽管理ができる市民ガーデナー育成講座を開講しています。市民が長期的かつ継続的に学び、公共花壇で実際に管理活動をしながら、市民ガーデナーとして、リーダーシップをもって自ら公共花壇の植栽管理ができるまでのスキルを身につけます。今後は、受講生のニーズに合わせた具体的な講座を提供し、市民ガーデナー育成を促進していきます。

2023-

GREEN MARKET

東遊園地のオープン時から始まったGREEN MARKETは、現在年2回のペースで開催されています。このイベントでは、花卉農家や園芸店などのグリーンの生産者と消費者が直接出会える機会を提供しています。また、地元の花店による切り花の販売や、自然に関するトークやワークショップ、そして東遊園地の3つのガーデンを巡るツアーなど、暮らしにグリーンがあることの豊かさを体験できます。2年目となる2024年には、豊かな暮らしと地球環境保全のつながりをテーマに、肩肘張らずに考え、関われる様々なアクティビティが企画されています。都市の中にみどりが当たり前にあり、東遊園地が人と植物の距離が近づくきっかけの場所となるよう、取り組みを進めていきます。

東遊園地 ↑GREEN MARKET

人と自然が共にいきる豊かさを感じられる風景を共につくる

京町筋南側

ボランティアとして参加にするには

Naturalistic Landscapingを取り入れ、植物本来の豊かさを感じながら四季の移り変わりを楽しみ育てる、市民みんなが長期的に参加できる植栽管理プロジェクト（GREEN COMMONS）の活動に参加してみませんか？

〇 GREEN COMMONSのインスタグラムはこちら ▶

寄付も受け付けています

神戸市全体にLiving Nature Kobeのムーブメントや「自然の景」を広げ、まちの風景をつくる花壇やボランティア活動を支えるための寄付を受け付けています。

個人の方は、ふるさと納税、企業の方はスポンサー花壇や企業版ふるさと納税など、それぞれのニーズにあった寄付の仕組みを用意しています。

〇 **問い合わせ先：**

神戸市建設局公園部魅力創造課
メールアドレス：
park-miryoku@office.city.kobe.lg.jp

2021年に策定されたLiving Nature Kobeも2024年で4年目に入ります。リニューアル後の東遊園地は、植栽デザインから生まれた自然の心地よさに惹かれ、多くの人々で賑わっています。この様子はまさに目指していたビジョンそのものの情景です。しかし、Living Nature Kobeの取り組みは始まったばかり。これからも、さらなる取り組みの拡張を図っていきます。

2022年から実証実験を重ねてきた京町筋はNaturalistic Landscapingで「自然の景」としてのつながりが強化されていきます。2025年にオープンするGLION ARENA KOBEをはじめ、神戸ウォータフロントの緑化がビジョンとして掲げられています。2029年オープン予定のJR三ノ宮新駅ビルや、クロススクエアに面したデッキも緑あふれる計画となっています。将来、都心・三宮を中心に、Living Nature Kobeのムーブメントが広がり、「自然の景」でまちがつながり、季節の変化や自然の心地よさを感じることができる美しい都市景観を広げていくためには、より多くの方々との協働が必要です。Living Nature Kobeに参画し、人と自然が共にいきる「自然の景」を一緒につくりませんか？

東遊園地｜見晴らしひろば

これからの神戸のまちづくりを牽引する みどりと花のあり方とは

Living Nature Kobeの策定に向けて、神戸市の政策におけるみどりと花の位置づけを整理し、進行中の都心・三宮再整備の背景を踏まえた課題を洗い出しました。そして、課題解決の参考となる新たな潮流を把握するため国内外の事例を調査し、その潮流を神戸に取り込むために、関係者へのヒアリングを実施しました。ここでは、そのプロセスや検討内容をご紹介します。

神戸市政策における位置付け

神戸の緑のまちづくりは、緑の基本計画（グリーンコウベ21プラン）に基づき、「緑とともに永遠に生き続ける都市＝緑生都市」を目指しています。基本計画では、神戸のもつ地理的・歴史的特徴やこれまでの緑に対する取り組み・現況・特徴などをふまえ、都市空間に対して、みどりの将来像を描いています。このグリーンコウベ21プランを上位概念とし、2025年を目標年次とした中期的な取り組みとして、まちのゾーンにおける植栽に焦点を当て、戦略や施策を検討しました。

対象エリアについて

本取り組みを検討する上で、以下の5つの対象エリアへの展開を前提としました。

- **公共空間への展開**
  行政が運用主体となる大型公園や街路（東遊園地・フラワーロード・京町筋など）において、都市のブランド価値を高めます。
- **広場への展開**
  行政と民間が共同運用する広場（駅前広場など）において、エリアマネジメントを通じた多様な活動との相乗効果を高めます。
- **商業エリアへの展開**
  民間が運用主体となる商業エリア（建築緑化・ポケットパークなど）において、エリアの魅力を高めます。
- **住宅エリアへの展開**
  市民が運用主体となる住宅エリア（市民花壇・路地・空き地など）において、市民参加型のボランティア活動を活性化します。
- **田園エリアへの展開**
  生産者や地域コミュニティが運用主体となる里山エリア（里山、田園、空き地など）において、神戸の原風景を再創造します。

対象エリアへの展開は、長期的な時間軸の中で、段階的に拡張することを想定しています。初期フェーズでは、行政主導の公共空間から取り組みを開始し、実績を踏まえて神戸市内の駅前広場に活動を広げ、民間や市民の関心を高め、理解を深めながら、商業や住宅エリアにも取り組みを広げ、将来的には田園エリアに使用する植物の育成も行えるようなエコシステムを見据えて展開していくことを目指しています。

神戸市の都市景観づくりの背景

本検討が開始された2011年。神戸市では「海と山が育むグローバル貢献都市」を2025ビジョンとして掲げ、持続可能なまちづくりを推進していました。また、都心・三宮再整備の推進と回遊性の向上、ウォーターフロントなどの魅力向上、駅前空間の魅力を創造する「リノベーション神戸」の取り組みが本格化。2020年にスタートした「持続可能な開発目標（SDGs）」の世界的な潮流を受け、社会における自然保全や自然再生への意識の高まりから、生物多様性を踏まえた空間の整備が新たに求められていました。このような背景の中、神戸市では、以下の3つの課題に直面していました。

課題①：再整備における植栽のデザイン方針
都心・三宮再整備の推進と回遊性の向上において、三宮駅を中心とした山と海に伸びるフラワーロード沿線上では複数のエリアでの再整備が進行していましたが、各エリアを繋げる植栽デザインの基本方針が策定されていませんでした。

課題②：植栽の取り組みや公共・市民花壇の周知
神戸市では、オープンガーデンなどのシビックプライドの醸成につながる高品質な市民活動が存在していましたが、取り組み自体の認知度は低く、訪れたくなる街、住みたくなる街として、都市景観の戦略的打ち出しが不足していました。

課題③：インフラ管理におけるコストや人材
グリーンインフラの構築や公園施設の老朽化への対応が必要な中、維持管理コストの削減が強く求められていました。また、維持管理に貢献をしていた造園ボランティアの高齢化が進み、コストと人材の両面において持続可能な運用体制の検討が必要でした。

本取り組みでは、これらの課題の解決に寄与するため、海外の成功事例の調査と関係者におけるヒアリングを踏まえて、ブランディングの方針を模索しました。

京町筋北側

緑をとりまく世界の潮流

1つ目の課題「再整備における植栽のデザイン方針」に対して、植栽が大きな貢献を果たした成功事例を調査。多年草を活用したニューヨーク市のThe High Lineやロンドン市のKing's Crossのエリア再開発の計画を参考にしました。これらの事例では、グランドデザインの段階から植栽デザイナーが関わり、都市と自然が融合した新しい景観を生み出す植栽デザインの手法が採用されていました。近年、国内外にて、公共ランドスケープにこの手法が取り入れられ始めているトレンドに着目しました。

2つ目の課題「植栽の取り組みや公共・市民花壇の周知」においては、SNSの発展により、永続性がない花の瞬間的な価値を生かした取り組みが増えていることに着目。前述のKing's Crossの再開発エリア内にあるCoal Drops Yardでは、人の出入りが少ないエリアに対して、大量の花のプランターを一時的に配置する「Colourstream」というプロジェクトがオンライン上で話題になり、再開発後の新しい人の流れの創出に貢献しました。このような、SNS上の拡散を誘発する取り組みにて認知度を高めるアプローチを参考にしました。

3つ目の課題「インフラ管理におけるコストや人材」では、同じく前述のThe High Lineの植栽の維持管理を支えるボランティアやスポンサーの仕組みに着目。近隣住民のボランティアが植栽の手入れから、エリア内に植生する草花のガイドも行う積極的な活動が行われています。また、The High Lineのブランド力とSDGsの潮流を活かし、数多くの有名企業のスポンサーを獲得し、様々な企業イベントも開催されています。このように、植栽を起点にエリアのブランド価値を高め、新たなボランティア人材と企業スポンサーの募集を行う戦略的な取り組みを参考にしました。

関係者へのヒアリングによる仮説検証

検討を進めていくプロセスの中で、新たな潮流である都市と自然が融合した新しい景観を生み出す植栽デザインの手法を神戸市へ導入する可能性について、市内の関係者（造園・農業・行政）に対してヒアリングを行い、取り組みの前提条件を整理しました。

みどりと花の取り組みの前提条件

1 植栽デザインの目的と手法の共有

神戸市からの明確な目的と将来の展望を共有してほしいという意見が受託事業者から出ました。また、多年草を中心とした植栽デザインのガイドラインを整備し、事業者同士が共通した手本を元に学び高め合える環境づくりが求められました。

2 受託契約期間の見直し

現状の単年度契約では数年後を見据えた継続的な看視をすることが難しいという意見が出ました。生産者が計画的に多年草を育てたり、造園家が季節を通じた管理を行うためには、最低3カ年以上の長期の契約が求められました。

3 生産者と造園家のスキル習得

生産者や造園家が多年草に対して前向きな意欲を持っていても、新たな手法に対する知識がないため、研修を通じて一つひとつ学んでいく必要があるとの意見が出ました。特に植栽の枯れ姿などの季節の変化に対して配慮したメンテナンス方法を学べる環境が求められました。

4 多年草生産に向けた長期計画

生産者は、地形や気候にあった多年草の生産ノウハウや知識がないため、専門家からの指示の元、生産者組合と共に長期的な視点で作付けを計画する必要があるとの意見が出ました。

多年草の生産は、汎用性の高い種類を選択することが重要であり、また、フラワーマーケットなど新たな収入源の創出も求められました。

5 環境と気候に合う植栽管理のノウハウ蓄積

日本の気候における自然あふれる環境を想定すると、海外からのアイデアをそのまま持ち込むだけでは難しいとの意見が出ました。多年草のどの種類が気候に合うかどうかは、その地域で試行してみないとわからないため、市内の花壇で実際に取り組み、ノウハウを貯めながら段階的に街路へ展開していくことが求められました。

6 枯れることに対する意識改革

多年草植栽の取り組みを行う中で、「枯れている」という市民からのクレーム、冬枯れしている植物を踏み潰してしまう行為が報告されました。季節により植物の様子が変化する中で、枯れた姿も美しいと思ってもらえるよう、意識改革により市民の理解を得ることが求められました。

7 持続可能なボランティア体制

植栽管理に携わるボランティアは、多年草に適した水やりなどの知識が必要なため、スキルを上げていく必要性があるとの意見が出ました。園芸講座を運営し、卒業生を市民ガーデナーとして活躍できるような体制や、自立したボランティアを育成するために、公共花壇などの活動の場の確保が求められました。

Living Nature Kobeでは、先述の3つの課題解決にあたり、これらの7つの前提条件を踏まえたブランド戦略と施策を検討しました。

Case Studies　国内外の事例

自然と人とをつなぐ植栽デザインを取り入れて持続可能で魅力あるまちづくりを進める国内外事例

綾ナチュラルガーデン
錦原／尾堂／郷鳴
宮崎県 綾町

宮崎県 綾町では、「自然と共に生きるまちづくり」の一環で、多年生草本を中心とした植栽の取り組みが2019年に始まりました。「錦原」「尾堂」「郷鳴」の3エリアを中心に、専門家のアドバイスを受けて行政、町民、環境学の専門家、大学などが協働し、地元の在来種も多く利用した多年草の植栽に挑戦しています。錦原ガーデンでは、綾の里山を背景に野の植物が活かされた、季節をつなぐ風景づくりが進められています。河川堤防上の尾堂ガーデンはより気候条件の厳しい環境であるため、野や河川敷の植物のほか、砂も含め土壌基盤と植物の相性を観察する実験的な植栽となっています。また、町の本通りに位置する郷鳴ガーデンでは地域の庭を目的に大学生がプランニングを行っています。どのガーデンもその土地ならではの風景を意識したデザインで、綾町らしい植栽の組み合わせが模索されています。綾町での植栽活動は他地域へも波及し、地域間連携プロジェクトも生まれています。

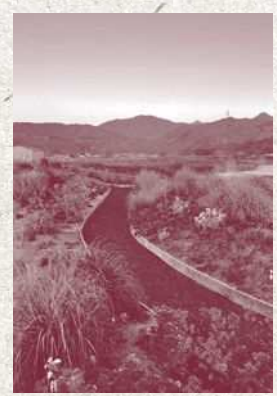


Photo by Aya town

福岡市植物園
福岡市 中央区

福岡市では、花・みどりの取り組みとして、『一人一花運動』を進めています。市民・企業・行政の共働により、人と人、人とまちの絆を深め、まちの魅力や価値を高める「花による共創のまちづくり」を目指すものです。福岡市植物園は、一人一花運動を推進する拠点として人材育成に取り組んでおり、その取り組みの一つとして、福岡の風土に根差した四季の自然な趣を楽しむ宿根草ガーデンのデザインや維持管理を担うガーデナーを育成する「ねづくプロジェクト」を推進しています。このプロジェクトは、みどりの活動を通じて人の輪がまちづくりにまで「ねづく」ことを目指しており、成長した人材が植物園のみならず、まちなかで活躍を始めています。

Photo by Fukuoka city

御堂筋 平野町街園
大阪府大阪市

Photo by green team

大阪の御堂筋では、将来の歩行者空間化を見据えた緑のあり方を提示する取り組みとして、大阪ガスビル前の交差点にある4つの植栽地が2021年3月に一般社団法人御堂筋まちづくりネットワークにより再整備されました。事前に、複数年生き続ける宿根草のライフサイクルに慣れ親しむため、プランターを使った宿根草中心の植栽に4年ほど取り組んだ結果、宿根草やグラスを中心としたガーデンが関係者に理解され、再整備案として採用されました。このガーデンの長所は、季節変化や高低差のある風景をつくることができる点。また、植物選びのポイントは、潅水設備を使用しないため、乾燥に強い品種や、長雨後の高温による関西特有の過酷な気候にも耐えうる品種を採用していることです。限られたスペースでありながら、植物が風や光を受けて表情を変える柔らかくオープンな雰囲気になりました。

The High Line
アメリカ ニューヨーク州 マンハッタン

全長約2.3km、地上9mにある廃線跡を植栽地として生まれ変わらせた「The High Line：ハイライン」。長い空間には16のガーデンゾーンがあり、それぞれが周囲の街並みによる微気候に合わせた異なる植栽デザインとなっています。北アメリカ在来の植物や海外の植物、園芸種を巧みに組み合わせた自然美あふれる風景は訪れるたびに変化が感じられます。環境上、奥行きが狭い植栽スペースは、歩行者との距離が近いため、倒れて見苦しくなった箇所が目につきやすく、広い空間の植栽地よりメンテナンス量が多くなりやすいという側面もあります。

Lewis Tse / Shutterstock.com

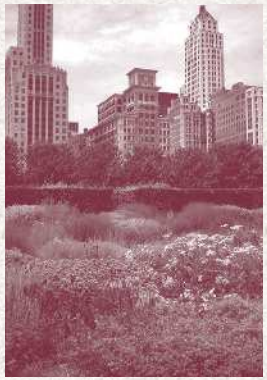
The Paleisbrug
オランダ 北ブラバンド州都 スヘルトーヘンボス

電車の線路をまたぐガーデンブリッジ「The Paleisbrug：パレイスブルグ」。植栽地の奥行きは狭いのですが、橋梁のサビ鉄の茶色い色味とも調和するナチュラルな植栽を実現しています。ここには自転車大国であるオランダらしく、自転車も乗せられるエスカレーターがあるのも特徴。近くに簡単に通れる陸橋がありながらもわざわざエスカレーターに乗り、自転車で植栽地のあるこの道を通る人々も多いことから、自然と心地良さが求められていることがうかがえます。

Marcel Bakker / Shutterstock.com

Lurie Garden
アメリカ イリノイ州 シカゴ

大都市のビル群にあるミレニアムパーク内にある、およそ一万平米の広大な屋上庭園「Lurie Garden：ルーリーガーデン」。自然の植生を参考にした植栽と生態系に配慮した維持管理方法を組み合わせ、都会のオアシスを生み出しています。使用されている植物のうち、およそ40%は北アメリカの在来種、26%はガーデンのあるイリノイ州の在来種になります。植物の多様性がデザインに組み込まれたガーデンは、美しく印象的な季節を体現するだけでなく、地元の昆虫や花粉を運ぶ虫、野生動物などの棲みかもつくり出しています。また、冬枯れした植物は春を迎える前に切り戻し、一部を土に戻すなど、その土地の中で循環させる取り組みも行っています。


Laura Platini / Shutterstock.com

Hauser & Wirth Somerset
イギリス サマセット

Lois GoBe / Shutterstock.com

ファームハウスを改装し、2014年にオープンしたアートギャラリーのガーデン「Hauser & Wirth Somerset：ハウザー アンド ワース サマセット」。周囲の緑と建築を背景に、いつ訪れても美しい風景が広がります。草丈が高く背景になるものを奥に配置しており、北米在来種スポロボルス・ヘテロレピスというグラスをベースにした野原感のある区画と、印象的な形や色の植物を大きな塊で配置した区画を交互に用い、歩きながら異なる自然らしさを感じる、アートギャラリーのガーデンならではの卓越した植栽デザインを楽しめます。